

『人生地理学』と中国

高 橋 強

皆さん、こんにちは。大変、お忙しい中、参加していただきまして、心から感謝申し上げます。今日の講演は『人生地理学』と中国ですが、むしろ『人生地理学』が中国とどのような関わりを持っていったのかという、そういう視点で、お話をしたいと思います。

先程、お話がありましたけれども、『人生地理学』はちょうど百年前の10月15日、まさに今日発刊をされました。

今日はもう一つ嬉しいことがありまして、皆さんも御存知だと思うのですが、中国が有人の人工衛星発射に成功したという、そういうニュースが入ってきたのですが、ご存知でしょうか。

今日こちらに、中国からの四人の交換教授の先生方もいらっしていますので、共に喜び合いたいと思いますが、どうでしょうか。先生方、本当におめでとうございます。やはり、中国と『人生地理学』の関係は深いなど、しみじみそう思っております。

先程申しましたように『人生地理学』は、百年前のちょうど今日発刊されました。その後1908年に一度大幅に改訂がなされ、これは第8版で、最終的には11版まで出まして、日本国内では、1923年に出版されたものが最後のようです。それぐらい20年間にわたって再版、再版を繰り返した、大変好評を博した書物だと言っても良いと思います。

この点につきましては、当センターの塩原事務長が、大変、詳しい研究をされておりまして、『人生地理学』の発刊の経緯については、塩原さんの論文を参考にされると良いと思います。

まず、日本国内では、『人生地理学』が発刊されますと、直ちに新聞雑誌等にその書評が出ます。全部で41の書評が出まして、そのことについては、塩原さんがまた詳しく調べられております。当センターの研究紀要の第2号に詳しく出ておりますので、そちらをご覧になっていただきたいと思います。

私は『人生地理学』が中国で、どのような評価を得ていったのか、それについてお話をさせていただこうと思っています。全部で9つの項目に分けて、お話をさせてもらいたいと思います。これはまだ、研究を始めたばかりでありまして、むしろこれを聞かれた学生の皆さんが、この方面だったら、少し自分でも調べてみようか、という人がたくさん出て来て下さることを念願しております。

簡単な言葉で言いますと、エビで鯛を釣ろうかな、というふうに思っています。私は、今、中国語も教えておりまして、エビで鯛を釣るというのは、中国語で何というか、中国語専攻の学生が、たくさんいらっしゃいますけれど、聞くことはしませんけれど、中国語で「抛磚引玉」と言いまして、直訳しますと、煉瓦を投げて玉を引き寄せるとなります。同じ内容を言おうとしても、日本では魚を使い、中国では玉石を使います。どちらがよいでしょうか。玉の方が良いと思います。鯛より玉の方が良いのじゃないでしょうか。それでは本題に入りたいと思います。以下九つの項目に渡って、紹介したいと思います。

1. 「浙江潮」掲載の『人生地理学』

まず、最初に「浙江潮」という中国語の雑誌を紹介したいと思います。私が思うに、『人生地理学』に対する中国の最初の反響は、「浙江潮」という雑誌に載った『人生地理学』の翻訳論文だと思っています。

今日はお配りした、手元にある資料をご覧になってもらいたいと思います。これは「大白蓮華」(2003年6月号)という雑誌に掲載してもらったのですが、その44頁の下のところに写真があります。「浙江潮」もちょうど百年前発刊されたもので、今ここに現物があります。当センターで保存をしているものなんですけれど、1903年に発刊された第1期から第10期までのものを製本したのですが、百年前の中国語で書かれておりまして、私は、現代中国語しかやっておりませんので、これを読むのは大変、難解です。

ここで、まず「浙江潮」という雑誌がどういうものなのか、簡単にお話をしたいと思います。これはちょうど1903年、中国の時代で言いますと、清朝末期に当たります。その清末において、日本にたくさん中国から留学生が来ておりました。その留学生の中で、皆さん出身別に同好会を作って、勉強をしたり、なかには革命をやろうというグループもありました。ここで言う「革命」というのは、清朝を倒して漢民族の王朝を作ろうということです。

その中に浙江省の出身の人たちが作った「浙江同郷会」というのがありました。その幹事のグループが編集をした雑誌が「浙江潮」で、発行所は「浙江同郷会雑誌部」というところなんです。ちょっと、面白いのは、印刷は日本でやっているのです。東京にあった並木活版所という印刷所で、中国語の雑誌を印刷をしていました。

この雑誌は1903年1月から発刊されまして12期まで数えております。これは月刊誌でありましたので、翌年の2月まで出版をし続けています。大体のボリュームなんですけれど、毎号200頁ぐらい。発行部数は期によって違うのですが、平均すると、二千部前後です。第8期くらいになると五千部は出しておりまして、恐らく、これは次第に好評を博して、これを購読する人が増えた、と考えて良いと思います。日本でこれを発刊しまして、中国国内、または、日本でも、売るわけなんですけれど、中国国内では30ヵ所で、販売しております。

この雑誌の中の記載を見てみますと、どんなところで販売されたのかがわかります。例えば、杭州とか、寧波、温州、上海、蘇州、無錫、南京、武昌、北京、成都、広州、長沙、こういった所で、販売され、読まれていきます。

この雑誌は、正確には、革命を鼓舞するような愛国主義の溢れるような内容のものが多くです。その中の「浙江潮」第9期なんですけれど、1903年11月8日に出たのですが、牧口先生の『人生地理学』第17章の「植物」というところを、黄孫さんという人が「植物と人生の関係」というタイトルで翻訳して出しております。

今、私が考えるに、これは中国の一番最初の、この本に対する反響ではなかったかと思います。これはよく見て見ますと、「植物」のところを翻訳しながら、それに中国の現状を加えながら、時には個人の見解を述べながら、かなりしっかりした翻訳論文になっております。

どうして、また、こういったところに興味を持ったのかなと思います、その視点でこの翻訳論文を読んで見ますと、一つは『人生地理学』の主題であります人生・生活との関係、つまり人生・生活と地理、人生・生活と環境の関係、こういったところを『人生地理学』は述べておりますので、まず、そこに興味を持ったのじゃないか。すなわち、「植物」の章を訳しているのですが、タイトルにわざわざ「植物と人生との関係」とタイトルを付けているところからも、こう

いうことが言えるのではないかと、思います。

二つ目は「植物」のところを翻訳をしているのですけれども、全体のトーンが、中国を産業で救っていくのだ、という「産業救国」と言いますか、そういうトーンが非常に強いと言うことです。「植物」の章では米の話とか、麦の話だとか、豆の話だとか、そういった内容も多く含まれているのですけれども、そういうものを紹介しながら、中国の現状を紹介し、この翻訳論文は農業と林業の振興を強調しております。従って、この『人生地理学』の「植物」の中の、特に、産業を振興するという、こういったところに興味を抱いたのではないかと思います。

三つ目に、実は、『人生地理学』は、ただ単に人生と地理の関係を述べているものではなくて、帝国主義の批判をした部分が何ヵ所かあります。日本に留学している当時の留学生は、清朝が列強によって植民地化されつつある、半植民地化されつつある、そういう意味で帝国主義に対して大変に怒りを持っていました。そういう人たちが、帝国主義を批判した『人生地理学』を読んだ時に、やはり、印象深く読んだのではないかと思います。大きく言うと、以上の三つの理由でこの『人生地理学』を翻訳したのではないかと思います。

これは蛇足になると思いますが、同九期に魯迅の書いた「スバルタの魂」という、こういう文章も掲載されております。魯迅は、浙江省出身の留学生でありまして、やはり、この「浙江潮」の雑誌の発刊に様々な形で関わっていたようで、たくさんの文章を載せております。何故、私が敢えてこの話題をここに入れたのかと言いますと、魯迅もこの「植物と人生の関係」という文章を読んだのではないだろうか、という願望を持っているからです。魯迅は「スバルタの魂」で愛国主義を鼓舞した内容を、この文章で表現しております。

次に「浙江潮」の第10期に、これは12月8日に出るのですが、先程の黄孫さんの翻訳論文の続きと、もう一篇、壮夫さん、これもペンネームのようですが、壮夫の「地人学」即ち、『人生地理学』第10章の「海洋」のところを翻訳をした論文が出ておりました。実は、壮夫という人は「地人学」というタイトルでこの「浙江潮」の4期、5期、7期、8期において、すでに4回にわたって、内村鑑三の『地人学』をずっと訳してきておりました。

ところが、第5回目の内容になりますと、内村鑑三の『地人学』ではなくて、急に『人生地理学』の「海洋」を翻訳をして、この「地人学」の中に入れているのです。内村鑑三の『地人学』をその後、見てみましたら、ちょうど、タイトルとして「海国」というタイトルの章がありました。ですから、恐らく、壮夫という人は、第5回目の翻訳として、内村鑑三の『地人学』の「海国」を翻訳するつもりでいたのでしょう。ところが『人生地理学』に出会ったものですから、この「海洋」の内容を翻訳したのですね。どうしてなのかな、と私も考えたのですが、やはり、注目した理由は、先程、「植物と人生の関係」を翻訳した黄孫が注目したのと同じ視点であったと思っています。

どういうことかと言いましたら、壮夫の「地人学」は、冒頭に、こういう出だしで始まります。「海洋と人生の関係はいかなるものであろうか」とここから始まるのです。従ってこの壮夫という人は、人生と海、人生と海洋、こういうところに関心の的があったのではないかと思います。

「海洋」の中には、漁業とか水産業とか、そういうことについて詳しく述べられております。これも、当時の留学生が「産業救国」、産業を興して国を救う、という問題意識に「海洋」がちょうど当てはまっていたということです。

それにプラスして『人生地理学』の中では、帝国主義の批判をしています。実は、この「海洋」の中には、こういう項目がありました。それは「太平洋と列国」という項目です。ここで、牧口先生は列強のヨーロッパの国が、太平洋の海洋をどのように支配をしているのかについて、詳しく述べているところがあるのです。だから、それを留学生が読んでこれは多くの人に紹介した方が良く、ということで、この「海洋」に注目したのではないかと思います。

同10期にも、魯迅の「地底旅行」という文章が載っております。もう一点、これは一つの課題なんですけど、実は、黄孫が書いた「植物と人生の関係」という翻訳論文と、壮夫が書いた「地人学」の翻訳論文の論調、すなわち、「産業救国」、帝国主義批判の論調は、魯迅が「浙江潮」の第8期に書きました「中国地質略論」の論調と極めて類似をしているのです。

魯迅は、この「中国地質略論」の中で、中国には特に、石炭という鉱物を中心とした資源がたくさんあるので、こういうものを列強の国々に渡すのではなくて、利用して産業を興して、国を救っていくのだと強調します。私はこれも仮説なんですけど、魯迅の「中国地質略論」を読んだ他の留学生たちが、非常に感銘を受け、そしてちょうどその頃に『人生地理学』が出版された。読んで見ると、“これは使えるぞ”という感触を持ったのではないかと思います。前述の翻訳論文は、そのきっかけは魯迅が作ったのではないかなと、思っています。この辺についてはここにいらっしゃる皆さんと、一緒に研究がこれから深まっていけばいいなと思っています。

以上が、中国という視点から見た、『人生地理学』の一番最初の反響ではなかったかと思えます。

2. 『人生地理学』と弘文学院

2番目の項目ですけれど、今度は、弘文学院からの視点で見たいと思います。牧口先生は1903年に『人生地理学』を発刊しまして、その翌年から、弘文学院という学校で地理学を担当し『人生地理学』を講義しておりました。

弘文学院が何処にあったか、ということなんですけど、そのメインの校舎は今の新宿にありました。1902年から1909年まで続いた学校で、この学校を創立したのは、皆さんもご存知の、講道館柔道を創り上げた嘉納治五郎という人です。

当時、嘉納治五郎は、東京高等師範学校の校長をしておりました。日本の教育界では大変、権威のある人物でした。嘉納治五郎は、政府から依頼をされて、中国の留学生を特別に教育をする学校を創りました。

牧口先生は、1904年の2月から7年4月まで教鞭を取られ、4年間に渡って、中国の留学生と交流を持っていられました。この学校では通訳を立てて、講義をしていましたので、中国語でやる必要はありませんでした。しかし4年間、留学生と交流しておられたので、簡単な中国語はお出来になったのではないかと思います。

この弘文学院は、当時有名な学校でありまして、1906年のデータですけど、当時、日本には中国の留学生が約8000人おりまして、その8000人の中の5人に1人はこの弘文学院に通っていた、ということです。どれだけ有名で、内容のある学校であったか、ということがお分かりだと思います。

この学校では、たくさんの人材を育成しております。この学校を出た学生の中で、例えば、教育界で言いますと、中国の九つの大学の学長を輩出しています。例えば、北京師範大学とか、

上海交通大学とか、広州大学であるとか、湖南大学であるとかなど。さらに、大学の教授を数えて見ましたら、32名いました。こういった教育界の人材だけでなく、その後、孫文などと一緒に、中国革命を推進した人物も弘文学院の卒業生の中でたくさんいます。

例えば、黄興という人は、孫文が文武の文だとしますと、武の代表と言って良いと思います。それから、陳天華。この人は言論戦で非常に活躍した人ですけれど、東京にいた時に中国人があまり団結をしない、と憤慨をして、大森海岸に入水自殺をしてしまいます。それから、林覚民。この人は広州で孫文が蜂起した時に殉死をするわけですが、有名な遺書が残っております。それから、宋教仁がいます。この人は、当時、国民党を率いて、本来ならば、國務總理になるはずだったのですが、袁世凱の刺客によって暗殺されます。

それから、魯迅もこの学校で勉強をしております。李四光という人、この人はその後、北京大学の教授になるのですが、新中国建国以後、中国科学院の副院長になりました。以上のように様々な人材を輩出しております。弘文学院はトータルしますと、約7000人の中国の留学生を、教えたという統計があります。

この弘文学院が揃えた教授陣は、なかなか立派な人がたくさんおりまして、その中の一人に松本亀次郎という人がいます。松本亀次郎は、その後、1917年から19年頃まで、周恩来総理が日本に留学をしまして、日本語の学校に通っていたのですが、この松本亀次郎がその日本語学校の校長でした。松本亀次郎は、周恩来総理と麗しい交流を持っていたようです。

このような人や環境の中で、牧口先生は、中国の留学生と『人生地理学』を通してながら、交流をしていました。この弘文学院で留学生とどのような交流を持っておられたのか、これも、まだ、はっきり分かっておりません。これも大きな研究課題だと思います。

弘文学院で間違いなく、牧口先生は教えていた、という証拠写真が発見されたので、これも、今日配った資料の「大白蓮華」の45頁をご覧ください。この写真は講道館柔道資料館というのですが、そこで発見されたものです。

牧口先生は、この写真の前から2列目の右から3番目、これが牧口先生です。牧口先生の左3人目に嘉納治五郎が写っております。この写真は、上の文字を見ますと、ちょうど卒業生と一緒に撮った写真でありまして、どこの卒業生かというのは、この文字から分かります。

昔の日本語ですから、右から左へ読んでいくと、「弘文学院蜀楚普通班卒業」と読めます。蜀というのは四川省のことで、楚というのは湖南省です。従って、ここに写っている留学生は四川省、湖南省からの留学生です。この名前が特定出来れば良いなと思っています。将来の一つの夢なんですけど、全員の名前を割り出し、その後、どうなったか調べてみたいと思っています。

なお弘文学院時代、牧口先生は1906年、日本の教育事情を視察に来た「清国教育視察団」（黄紹箕団長）との懇談会に出席し、教育の担当者とも交流を深めておられます。

3. 『人生地理学』の中国に関する記述

話は変わり、3番目の項目ですが、この『人生地理学』の中では、中国をどのように見ていたのかということです。全部、調べたわけではありませんので、一応、目に止まったものだけの一部をご紹介します。

『人生地理学』の「人類」の章を見てみますと、こういうところがあります。

「将来の運命を左右すべき最も恐るべきものは、むしろ中国人ならんと結論せり」と。牧口先生は、様々な学説等を検討しながら、こういう結論を出したのだと思います。すなわち、将来、

運命を決する最も大きな影響を持っているのは中国人だ、と述べられております。それから、「国家地論」の中ではこのように述べておりました。「中国は個人で見ると、富であり、強であるが、国民的な結合の道徳はあと一步である。だから、中国には教育の普及が必要である」と。これは、ごく一部でまだ、様々な見方を示しておりました。これらの検討もこれからの課題になると思います。

私は、『人生地理学』の初版本だけを見たのですが、これは11版まで重ねますから、その後、中国への見方がどのように変っていったのか、これも初版から11版まで見ることによって、その変遷というものが見えてくると思います。

これは、その関連なのですが、先程、私は『人生地理学』は帝国主義の批判をしている箇所がある、と紹介しました。この帝国主義の批判をした箇所は、初版と第8版と比較をしてみますと、第8版の方が帝国主義に対してかなり厳しくなっています。

それは恐らく、1908年に第8版が出版された事を考えると、1903年に初版が出版され、1904年に日露戦争が起き、日露戦争を経験するに伴って、帝国主義に対する批判が更に厳しくなっていたのかなとも思っています。この点の検討も、これからの課題です。

4. 『江蘇師範講義 地理』

次に、4番目の項目ですが、それは弘文学院で『人生地理学』の授業を受けた学生が、その講義を聞いて教科書を作った事に関連します。その教科書の名前は『江蘇師範講義 地理第七編』です。これは写真が出ておりますから、見て下さい。「大白蓮華」46頁で、このキャプションがちょっと違うのですが、46頁の真ん中の段のところにある写真が、『江蘇師範講義』の表紙をめくって最初の頁です。そこに見えにくいと思いますが、左頁に「人生地理学」という文字がみえます。その隣は「日本牧口常三郎講義」という「講授」、そういう文字が見えます。

この写真の上段にある背表紙を撮った写真は、これは第5番目の項目であります『人生地理学』の全訳本の背表紙です。

『江蘇師範講義』についてのお話に戻りたいと思うのですが、この本の編集者である江蘇師範生は、江蘇省から来ていました。将来、学校の先生になろうという師範生が弘文学院で授業を受けて、その人たちが編集をしました。発行所はどこか、と言いますと、江蘇寧属学務処と江蘇蘇属学務処という所です。

「寧属」というのは、江蘇省の南京辺りのことを言います。それから「蘇属」というのは蘇州辺りのことです。この本は南京、蘇州にある学務処によって発行されたのです。学務処というのは教育を統括する機関で、1905年1906年頃には、中国の教育制度の中で、すでに地方に於いても、設置されておりました。

教育制度が整備されると、直ぐ必要なのは教科書なんですね。ということで、この学務処は日本に留学している高等師範生に連絡をとり、教科書になる良いものがあったら紹介を下さい。そして、それを出版下さいという、こういう背景があったと思います。この江蘇師範生は、留学を終えて帰国する際に、恐らく、東京にあった並木活版所という所で印刷をしてもらって、それを持って帰国をしたのではないかと、考えております。

従って、この本は1906年4月1日に発行されたとしますと、この江蘇師範生は、その前に来ていたことになります。1905年に在籍をしていた江蘇師範生を調べてみると5人おりました。恐らく、この5人の方が取り組んだのではないだろうかと考えています。これも仮説なんですけど。名前が分かれば良いのですが。それから『江蘇師範講義』の序をよく見てみますと、ど

うしてこれを教科書にしたのかということが、短いのですが、書かれていました。

このことは「大白蓮華」45頁のところにすることができます。45頁の一番下の段、前から4行目の序の中に「人生地理学は根拠がなかなか正確だ。そして論議も多く豊かだ。だから、これを教科書にする」と。

今回、発表の場を設けて頂けるということで、もう一度、この『江蘇師範講義』を読んで見ました。すると『人生地理学』の全訳とは少し内容が違っているなど言うことに、気が付きしました。

即ちこの『江蘇師範講義』の内容は、例えば、牧口先生が日本の港を説明したら、必ず、中国ではこうである又ああである等、中国の事情をたくさん紹介しています。そこで想起したのが、牧口先生が、『人生地理学』を中国人の留学生のために、分かりやすく書き下ろした「教科日誌」の存在です。

実は、ここにいらっしゃる塩原さんは、かつて「大白蓮華」（2001年6月号）に「教科日誌」というものが、すでにあって、その「教科日誌」に基づいて、牧口先生は講義したのではないかと、仮説を立てておりました。

その視点から再度『江蘇師範講義』を見てみると、様々なところに、中国と日本の話題とか、また多くの中国の事情が出てきます。例えば、「中国人と日本人は」とか「中国文学は、すでに早くから開明に達していた」等。こういった文章は本来『人生地理学』の方には、見当たらない表現です。従って、これは、牧口先生が中国の留学生のために、将来、国に帰って地理学を教えるであろうと思われる留学生のために、書き下ろした内容が、この『江蘇師範講義』の内容になっているのではないのかなど、仮説を立てております。これも検討課題です。

5. 『最新人生地理学』

次に5番目の項目です。それは、1907年出版の『最新人生地理学』のことで、これは『人生地理学』の全訳です。最初から最後まで、中に入っている地図も、カラーだったのですが、そのカラーの色も全く同じです。『人生地理学』というのは千頁にわたる大著です。この大著は翻訳をするためには、それなりの覚悟が必要です。大変、時間もかかるし、労力もかかります。従って、この本は学術的に、大変な価値がある、ということを認めたその証しとして、この本の翻訳に取り組んだのではないかなと思うのです。

1906年の段階の『江蘇師範講義』は、教科書として、1907年の段階では、学術書として出版されたと考えています。訳述者は「世界語言文字研究会」編集部ということになっていますが、具体的にはどういう人たちなのか、まだよく分かっていません。

面白いのは、この編集部の本部は青島（チンタオ）にあり、この本の発行所は上海（群益書局）で、印刷所は東京（翔鸞社）にありました。ここで皆さんは、何故、中国で印刷しないのかな、と思うかも知れませんが、理由はこうだと思います。当時、日本の印刷技術が良かった、という事だと思います。どのように良かったかと言いますと、例えばこの「浙江潮」で見ると、1903年当時ですけど、表と裏に印刷していますね。こういう印刷方法については、日本の方が進んでおりました。

中国ではどうしていたか、と言いますと、例えば、片面に印刷をして、そうして折りこんで閉じるというやり方をしていたそうです。

この『最新人生地理学』は大変に好評でありまして、1907年の6月に初版が出まして、その年の10月には再版まで出ております。こういうことは、大変、珍しいことである、と中国の学

者が言っておりました。誰が言ったかということなのですが、それは、この『最新人生地理学』を研究した本が2000年に2冊出ました。『最新人生地理学』だけを研究したわけではないのですが、2000年に2冊の本が出まして、その本の中で『最新人生地理学』のことも触れておりました。

1冊は郭双林という中国人民大学の教授なんですけど、その人が『西洋思潮激動下の清末地理学』という本を書きまして、この本の中で『最新人生地理学』は二つの面で、中国に大変、大きな影響を与えたと、結論付けております。一つは、中国の郷土地理教育の理論とか方法に、大きな影響を与えた。もう一点は、中国に対して民主思想の学説、これを広める意味で貢献をしていると。それからもう一冊は、鍾振環という復旦大学の教授なんですけど『清末中国における西洋地理学』という本を書いて、この本の中で『最新人生地理学』のことを紹介をしておりました。

このお二人には、私は、直接、会ってインタビューをしたのですが、このお二人にしましても、同じ年に再版が出るということは、大変、珍しいことだと言っておられました。

今日、この『最新人生地理学』は9冊、その所在が確認されております。北京師範大学、蘇州大学、復旦大学、中山大学そして南京図書館、浙江省立図書館にそれぞれ1冊づつあります。それから上海図書館に行きますと、3冊あります。実は、これらは、私が全部、調べたわけではありませんが、中国から来られた交換教授の先生方が帰国された時に、調べて下さいまして、判明したものです。そういう意味で、9冊確認出来たというのは、将に、日中合作なんですね。合作の賜物なんです。

今後、まだまだ、この本は中国の各大学から、もっと出てくるんじゃないかなと、いう予想もしておまして、将来的には『最新人生地理学』が、中国のどういう大学、図書館にあるのか、こういうことを調べて、その広がりというものを地図にしていきたいな、と思ってます。また、その際には、交換教授の先生方をお願いをすると思いますが、その時はよろしくお願いします。

6. 日本語版『人生地理学』（1906年）

今まで紹介したのは『人生地理学』の中国語版のことですけど、実は、日本語の『人生地理学』が見付かりました。どこにあったか、と言いますと、南京大学の図書館にありました。1906年版のものです。これが第6番目の項目です。

本というのは、面白い物で、思わぬ歴史的痕跡をも残してくれます。例えば、その本に蔵書印が押してあると、もっと、その本の歴史が分かります。たまたまこの本には2つの蔵書印がありました。1906年に出版された『人生地理学』日本語版が、その2年後には、南京に設立された「两江法政学堂」の図書館に納められておりました。同学堂蔵書印がありました。この学校は、法律とか、政治関係の人材を養成する高等教育機関でありました。

それから、その後、南京大学の胡小石という教授の蔵書印も押されておりました。この胡教授は、国学大師として有名な人ですが、この方の蔵書の中にも入っておりました。

印鑑ということで、先程言い忘れたのですが、浙江省立図書館にあった『最新人生地理学』には章厥生という教授の印鑑も押されていました。

更にまた章教授は本に書き込みもしているのです。○を付けたり、△を付けたり、また書き込みもしていました。この部分はちょっと言い過ぎではないとか、この部分は評価に値するとか、といった具合に。

この章厥生教授、どういう人か調べてみたら、分かりましたので、簡単に紹介しておきます。この章教授は北京大学、北京師範大学、南京東南大学で、文学部や歴史学部で講義をして、次のような本を出しているのです。『歴史大事典』とか『中国文化史』とか、その類いの本を沢山出しております。そのような教授が書き込みをしたということは、何か惹かれるものがあり、その後の著作活動に引用をしていったのではないかと想像をめぐらせています。

7. 『人生地理学』

今度は7番目の項目です。1909年に『人生地理学』の中国語版が、もう一種類出版されております。これは上海新学会が1909年に発行したもので、凌廷輝という人が翻訳をしております。この人は「浙江同郷会」の会員で、1903年に弘文学院を卒業し、1908年から浙江兩級師範学堂で歴史・地理学を教えています。

実は、この『人生地理学』はまだ見付かっていないのです。それでどうしてこの『人生地理学』が、牧口先生の『人生地理学』の翻訳だと断定出来るかと、疑問を持つ人がいると思います。その理由は、先程紹介した郭双林教授が、ドクター論文を書く時に、この凌廷輝訳の『人生地理学』を読んで、詳細にメモを取っておられて、それを見せてもらった結果、判明したのです。そこで実物はどこにあるのかということですが、郭教授に聞いたところ、開封図書館で見たということでした。現在実物を確認中です。

8. 『人生地理学』の中国人文地理学への影響

次は8番目の項目です。この郭林双教授の学説によりますと、清末の中国に於いて、人文地理学に大きな影響を与えた外国の文献に3種類あるとのこと。その3種類というのは、今日、説明した4番目の『江蘇師範講義』、5番目の『最新人生地理学』、7番目の『人生地理学』です。

即ち全て牧口先生の『人生地理学』だということが分かります。そうすると、その後の中国の人文地理学にいくらかの影響をもたらしたのではないかと想像できます。中国は1911年に辛亥革命をやりましたが、その後、しばらく混乱が続きますから、もう一度、学問が復活してくるのは1920年代からでしょうか。20年代以降、『人生地理学』という名前の付いた本はないか、と思い調べて見ましたら、1925年の『人生地理学』、1930年の『人生地理概要』と『人生地理学史』。1942年の『近代人生地理学之発達及其在我国之展望』という書物が目録にありました。

こういった目録を中心に、それらの本を分析して見ると、何か牧口先生の『人生地理学』の影響というものも見えてくるのではないかなと思ひ、調べて見ました。そうしましたら、白眉初という人が1923年に『地理哲学』という本を出しましたが、この内容の一部は牧口先生の『人生地理学』の「緒論」とか「産業地理」とかを間違いなく引用をしておりました。

白眉初という人を調べて見ると、鄧穎超女史の天津直隸第一女子師範時代の恩師だったことが判明しました。白眉初先生の提案が元になり、「穎超」という名前になったそうです。元々、鄧穎超さんは鄧文淑と言っていたそうです。こういう思ってもみない関連もありました。

また、1931年の『人文地理概観』は、これはまだ本文は見えていないのですけど、目次だけで見ました。『人生地理学』の「国家地論」とか「都会及び村落地論」とかに、極めて類似しております。本文を見ないと何とも言えないですけど（本文が後日入手でき分析して見ると、確かに『人生地理学』の引用でした）。

『人生地理学』が、その後の中国の人文地理学に、どのような痕跡を留めていったのかについては、現在北京大学の「池田大作研究会」の人たちと一緒に取り組んでいるテーマの一つです。

9. 『最新人生地理学』の現代中国語版

第9番目の項目でありますけれど、それは『最新人生地理学』の現代中国語訳ということでもあります。現在湖南師範大学の「池田大作研究所」で、進められております。同研究所では生態倫理学、環境共生の観点から、この本をもう一度読み直してみようというプロジェクトも、立ち上げております。

最後に、今回この発表を通して、一つ二つの感想を持つに至りましたので、それを述べて終わりたいと思います。まず1点目は、牧口先生は、百年前から『人生地理学』を通して、中国との教育と文化の交流を始めておられたということです。私は、この一点は、将に創価大学の大きな、大きな財産だと思っています。

その結果、牧口先生は中国に自分の教え子がいるということになります。現在私たちは、牧口先生が提唱された創価教育を受けていますが、そういう私たちにとって、あの中国に牧口先生の教え子がいたという歴史は、中国に対し更なる親近感をもたらしてくれるのではないかと思います。

また、牧口先生はその後、弘文学院で教えた後、小学校の校長をされるわけですが、そう考えると、牧口先生は、戦前に、日本にも中国にも教え子がいたことになります。そういう牧口先生にとって、戦前、日中関係が次第に悪化していったことは、牧口先生に大変大きな心労をもたらしたのではないかと思います。もし戦争になれば、教え子同士が戦うことになり、一人の教師からしてみましたら、それはもう耐えられないことではなかったかなと思います。その意味からも牧口先生は、反戦を主張し、平和を主張し続けられたのではないかとと思っています。

それから、もう1点、この『人生地理学』の影響は、20年代（その後の研究で30年代）まで、その痕跡は見られるわけですが、先程、触れました白眉初という人は『地理哲学』という本の中で取り上げております。『人生地理学』は人文地理学からばかりでなく、哲学の視点からも注目される程の広範な内容を含んでいたのではないかと思います。

私は、今後、日中間の教育文化交流に一つの美しい有意義な花を添えた、この牧口先生の『人生地理学』を通しての交流の歴史を、より深く解明して、牧口先生の遺志を継いで、日中間の文化と教育の交流を更に発展させて行かねばならないと思っております。また、そのことを今一番の模範を示して下さっているのは創立者池田先生だと思っております。

最後に『人生地理学』は中国において、むしろ正しく評価されていたんじゃないかな、という、これも仮説なんですけど、そういう印象をつけ加えさせていただき、私の講演を終わらせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

（本稿は、2003年10月15日の講演を加筆・訂正したものです。）